

山崎郷土叢刊

No. 74
元. 9. 1
兵庫県赤粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

近世初頭の山崎藩 (三十二)

島田清

二、池田輝澄時代 (三十二)

○ 山崎藩草創期の家老伊木伊織の出自と就任

前稿に記した山崎藩池田家の成立事情、ならびに家臣団構成の過程と実態の上に立って、藩政の流れを整理してみよう。

まず第一は、国家老として、藩政の中樞に立った伊木伊織の出自と、その就任についてである。

一、輝澄の出生と、藩主取立以前の事情

慶長九年四月二十九日、輝澄は姫路城内に生まれた。母は、輝政の継室で、徳川家康の二女督姫（輝政が播磨五十二萬石の太守

目次

①	近世初頭の山崎藩 (三十二)	島田清	1
②	戸原物語 (四)	志水出世	5
③	春の旅日記	志水美好	10
④	吉田松陰	安井清介	12
⑤	宗門人別帳(上ノ下村)古文書研究会		21
⑥	兵庫紙幣史の研究第一〇号		32
⑦	赤粟鉄山並金屋鑄物史料の発行		38
⑧	蔵書紹介		39
⑨	会報総目次 (No. 61 ~ 70 No.)		40
⑩	役員一部変更表		42
⑪	事務局だより		43

となり、姫路に居城するようになったとき、播磨御前と呼ばれた。幼名松千代、のち、左近と称した。

慶長十四年四月、六歳のとき、母に伴われて駿府に下り、はじめて家康に謁した。このとき、松平の称号を与えられた。(松平左近)

ついで元和元年五月、大阪夏の役が起こると家康に従い、役の

終った六月六日、従五位下に叙し、石見守に任ぜられた。そして、この年の六月二十八日、播磨国宍粟郡において三萬八千石を与えられ、山崎に居を構えた。山崎藩は、このとき、創設されたのである。輝澄は、このとき十二歳であった。

二、山崎藩草創期の家老伊木伊織の父、忠次

元和三年、輝澄は十四歳となり、十二月、従四位下に叙せられた。そして、翌四年、伊木伊織を五千石で召抱え、家老としたが、この伊織は、宗家の家老伊木清兵衛（のち豊後守）忠次の二男である。忠次がいかなる人物か、池田家においてどのような地位をもち、また、どんな活動をしたか、次に、概観してみよう。

天正十二年三月、長久手の戦で輝政の父信輝と兄之助が討死したため、二男輝政は二十一歳であとを継ぎ、同年四月二十八日、遺領の大垣城主となったが、のち、岐阜城に移った。輝政は、翌十三年五月、秀吉の紀州征伐に従い、八月には越中の佐々成政討伐、十五年には九州の島津征伐にそれぞれ従軍し、凱旋後の八月、羽柴の称号を許され、従五位下に叙された。ついで、十六年四月十一日、秀吉は後陽成天皇の聚楽第行幸を奉請したが、輝政はこれに先立って従四位下に進み、侍従に任ぜられ、豊臣の姓を許され、秀吉のために格勤した。

天正十八年、秀吉は北条左京大夫氏政を征伐するため軍を関東に進めた。このときも、輝政は従って功を立て、北条氏滅亡後は、

さらに陸奥平定のため、秀吉の先鋒となって岩代国会津へ進駐した。同年九月、輝政が三河国吉田城十五萬二千石を与えられたのは、こうした功績によるのであるが、秀吉が国内平定のため東奔西走したこの六年の間、若い輝政（二十一歳より二十七歳まで）を輔佐して榮進の道を開いたのは、筆頭家老伊木清兵衛忠次の功勞であった。この間の清兵衛は、常に輝政の傍を離れず、寢食を共にしながら輔弼の任に没頭したのであった。

慶長五年、関ヶ原合戦が起こった。このときも、清兵衛忠次は帷幄にあって輝政を輔佐し、論功行賞にあたっては、播磨国五十萬一千三百石が輝政に与えられた。輝政は同年十月、播磨国に入り、姫路をその居城としたが、清兵衛には、姫路に次いで重要な三木城三萬石を与えた。清兵衛は、これより豊後守と改め、姫路藩筆頭家老として忠勤をばげんだ。

伊木豊後守忠次と輝政との関係を実に知るエピソードが残っている。忠次が病に臥し、もはや回復の望みがなくなった日のこと、

株式会社

安井書店

90山崎町山崎郡宍粟
TEL山崎(0700)62(代)

最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ



忠次は、輝政にひとめ逢いたい、と申し出た。輝政が急いで邸に臨むと、忠次は、厚く礼をのべたあと、

「殿は、常に掘出しを好ませ給い、殊に、士の掘出しを専らに思召すが、これは、好からぬ御癖にござります。」

と輝政を諫め、

「士は、その分限より、一際、宜しく仰せ付けられてこそ、永く、御家を立去らず、忠節を存じましよう。」

と申しあげた。輝政は、大きくうなづき、

「只今の諫言、道理至極じや。その志、山より高く、海より

深い。生前において必

ず忘れまい。心安く思

えよ。」

と忠次の手をとり、涙を流して名残を惜しんだのであった。この時代における君臣間の理想的な姿が、この挿話の中から汲みとれるであらう。伊木忠次はこうした人物であり、輝政との間には、水魚の交わりがあった。

三、伊木伊織の兄、長門守忠繁

豊後守忠次の嫡子を長門守忠繁という。慶長五年、姫路へ入部した輝政は、翌六年から姫路城修築の大工事を起こした。このとき、普請奉行となって縄張全般の設計・施工にあたったのがこの忠繁である。姫路城が、普請・作事の両面にわたり、日本城郭の最高峰に位置づけられるすばらしい出来栄を示しているのは、この忠繁の立案と、それに朱筆を加え、手直しをした輝政の合作といえるのであるからであって、その功業の偉大さは、姫路城とともに青史に長くかがやいている。

姫路城の築城工事は、慶長六年より十四年まで、満八ヶ年をついやし、大・小天守閣以下、諸櫓・諸門を完成した。

四、輝政薨後の池田家(池田三家の成立)

慶長十八年一月二十五日申の刻(午後四時)、輝政は、脳溢血のため、姫路城内に薨じた。

將軍秀忠、ならびに大御所家康は、五十一歳の壮齡で死んだ輝政を惜しむとともに、輝政なきあとの池田家仕置を憂慮し、秀忠は安藤対馬守を上使とし、家康は村越茂助直吉をそれに副えて姫路城へ派遣した。両使は、姫路城の大広間において、池田一族、ならびに老臣・物頭を集め、上意を伝えるとともに藩内の実情を質し、四月二十七日、駿府に帰って奉答した。その結果、幕府は

仕置を決め、六月十六日に通達した。すなわち、若原右京亮良長・中村主殿助正勝の両奉行は追放となり、池田家は、利隆・忠継・忠雄の三家を分立することとなった。長男利隆の家は、播磨国（宍粟・佐用・赤穂三郡を除く）四十二萬石。二男忠継の家は備前国のほか、良正院（輝政の室督姫が落飾した後の名）化粧料として播磨国の内、宍粟・佐用・赤穂三郡十萬石を加えられ、三男忠雄の家は淡路国六萬石となった。これにつれて、家臣たちもそれぞれ三家に分属させられることとなり、伊木長門守忠繁や、輝政の甥出羽守由之以下の大身は、おおむね利隆に付けられて播磨にとどまり、荒尾志摩守重隆、同弟但馬守成房以下の小身は多く忠継に付けられて備前国におもむいた。

五、元和元年の池田家再編成

慶長十九年、利隆は三十一歳となった。この年の十月、いわゆる大阪冬の役が起こった。利隆は、秀忠の密命を受けて早く尼崎城に兵を入れ、幼少の建部政長を扶けて大阪方の出撃を遮るとともに、姫路城に帰って陣立をととのえ、出陣した。家老の伊木忠繁と従兄弟の出羽守由之とは、このとき、人質として江戸にとどめられた。

同十二月、大阪・江戸両者の間に和睦が成立し、利隆は姫路に、忠継は岡山に凱旋した。ところが、その後、間もなく、忠継は抱瘡を病み、二月二十三日、岡山城に歿した。（母の良正院は、大阪

冬の役がはじまると京都に上り、二条城の家康の營に居たが、この直前の二月四日、同じ病気で歿した。）

ついで三月、大阪夏の陣が起こった。この時は、伊木忠繁・池田由之ともに利隆のもとへかえされていたので、先鋒をつとめ、城北の地、すなわち天満付近で奪戦した。

五月八日、大阪城は遂に落城した。利隆は上洛して十日に二条城へ入り、家康に謁して戦捷を賀した。岡山城の兵は、忠継の急逝により、弟忠雄に率いられて出征した関係上、忠継は利隆より一足おくれて二条城に入り、家康に賀を述べた。

忠継の急逝後、間もなく、大阪夏の役が起こったため、

その遺領相続は決まっていなかった。しかし、その兵を忠継がひきいて大阪へ出陣した関係もあって、忠継の遺領は忠継に継がせることが決定した。すなわち、備前国二十八萬石に、備中国浅口・都宇・窪屋・下道の四郡、石高三萬五千石を併せ、三十一萬五千石を領することとしたもので、良正院の化粧料として忠継に

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790) 62-1190

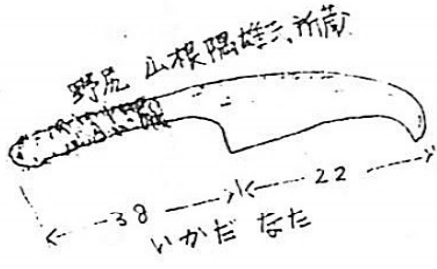
附属させられていた実栗・佐用・赤穂三郡の十萬石も、忠雄に相
 続させる内命が発せられた。しかし、忠雄は、部屋住の身である
 輝澄・政綱・輝興の三弟（母はいずれも良正院）に分ち与えた
 い旨願い出、許可されてその通りになった。時に、元和元年六月
 二十八日。山崎藩は、このとき、創設されたのである。伊木伊織
 が、この山崎藩の筆頭家老として、五千石の食禄で召抱えられた
 のは、これより四年後の元和四年であった。

戸原物語 (四)

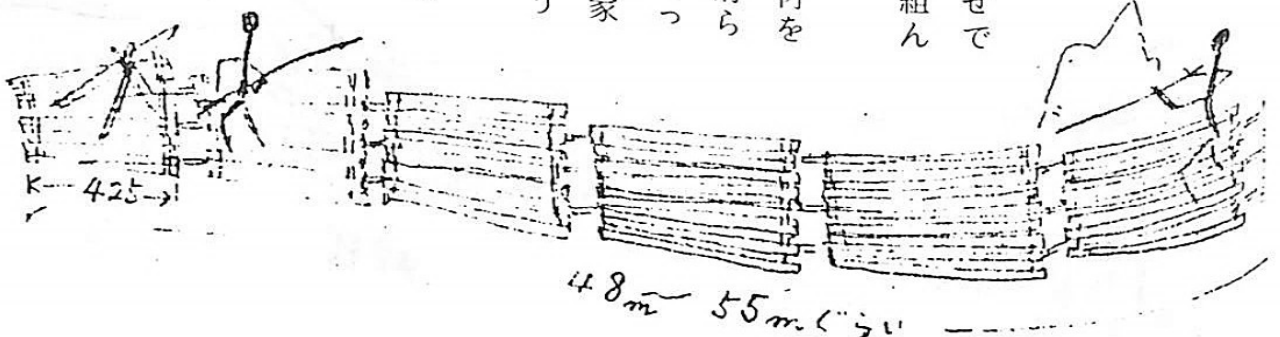
『揖保川の楢師』 いかだ(筏・桴・楫)

志 水 出 世

大正の初期のことやが、わたし（片山弁二郎氏II小野）の叔父
 は学校を終えるとすぐ筏乗りを始めたんや。小野だけでも十数名
 おられたから、波賀・一宮では四〇名はおられたと思う。こ
 の辺の山から切り出された木が榎田へたくさん集まってきた。こ
 主に杉や桧やが、たまに枕木（栗材）や電信柱もあった。その川
 原の楢組み場で組むのも一流れ四〇五人役は
 かかるから大変な仕事やった。羅断カサちを専門
 にしている人もいた。その蔓でしぼるんやが
 楢鉈ヌサで先ず用材の端に「かり」という深さ一
 寸位の切り込みを入れるのや。それは蔓が浅
 瀬ですり切れたり、すぼぬけんためのものや。
 末口さし渡し五〇六寸位なら七〇八本で四尺



巾位の楢が一组できる。末口を前にして
 十二〜三組繋いで一流れというのや。一
 本は十四尺やから全長は五十メートル位
 はある。電柱などは長いから（末口二十
 センチ長さ十五〜十六メートル）一番後
 ろにつなぐんや。そして少し下のしもどうがせて
 集結させておく。上野（小倉薬局の裏）で組ん
 だのもここで合流することがあった。
 「わたしは、とち引きや木馬きんまや車力で木材を
 出したが、上野では組んだ楢に水かけて滑ら
 せていたなあ。長台で曲里まで出すのもあっ
 たが、曲里の橋の東で曲がらいで、そこな家
 の障子をはずしてもらって通したりしたそう
 じや」（菟場忠太郎氏）
 楢が十四〜五流れできると次の朝は流すこ
 とになる。
 わたし（秋田喜市氏II閨賀）は閨賀橋の下や
 また上野の方へも行って流したが、出発は夜
 明けやが、いざ楢に乗ると身が引きしまる思
 いや。楢流しは秋から冬、春にかけての仕事
 やから寒い日などは、わらじの鼻緒がいてて
 しまつて折れそうな感じなんや。足や手がか
 じかんでハアハア息でぬくめながらの厳しい



仕事や。

足は糸でさした津山足袋をはくが、手袋なんかはかなんだ。棍棒をすぐからすぐぬれてしまうので、はいてもはかんでも同じや。新米の頃は、もし川にでも落ちたら大変やから緊張する。一流れに二三人乗っているが、横見して、うざうざ無駄話なんかしておれん。いつ岩に当たって大ふれがくるかわからんでなあ。やがて曲里まで来ると、三方川からも流しているのと合流することがある。

わたし(三辻竹五郎氏)は三方川流し専門やった。一番奥は三方橋からやった。川

の状態は日に日に違う。嵯峨山の奥のあらたき辺は、岩だらけでよう困ったもんじゃ。

島田のお宮のところに清野へ渡る板橋があった。

「わたしの母は清野から来ていたので学校(神戸小)帰りに祖母の所へよく行ったものです。橋といっても蛇籠あんで、中へ石をつめて橋脚にし、棧橋が架けてある。その上を渡る時、下を見る



と橋が動いているような錯覚をおこして川に落ちそうでしょう渡らなんだ。そんな時そこで仕事しよっちゃった島田のおばさんが腕をつかまえて渡して下さったものだった。(下村つるゑ様)三林)

その板橋の所まで棍棒が来ると、ヒョイと跳び上がってこすのじゃが跳びこし損ねて川にはまったりする。誰か足の骨折って運ばれた者もあった。

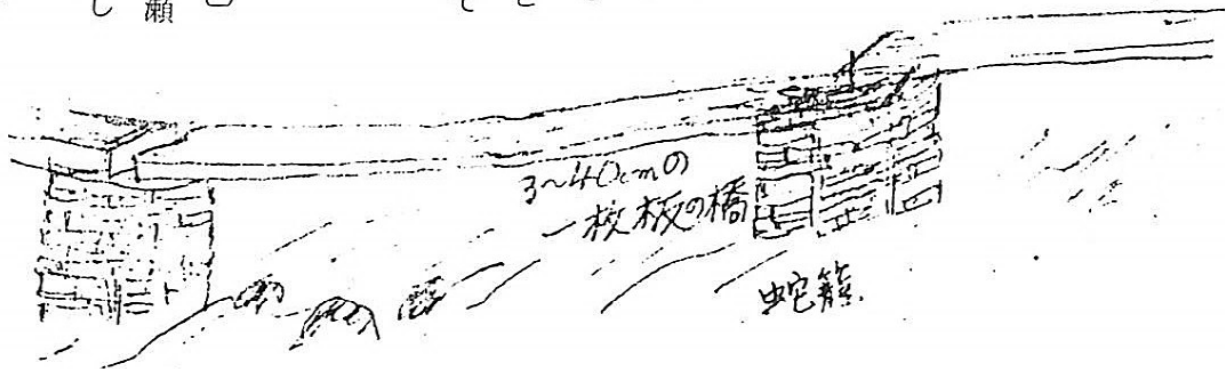
大正十二年九月に清野に発電所が造られた。その堰を発電所の水路係の人が切ってくれるんやが、ほんの少しの間より切ってもらえんから、流れた水にうまく乗らんと排水口の所まで行くまでに水が無くなって困ったものだ。

どんどど鳴るのは清野の向え
人を喰うのは与位のすり

(すり)深み)

と歌われたように、この辺りまでくると瀬も大きい、川巾も広くなり、だいぶ流しやすくなる。

神河橋(勿論その頃は無かった)の上の瀬も困ったものだ。一人は先頭で棍棒を操る



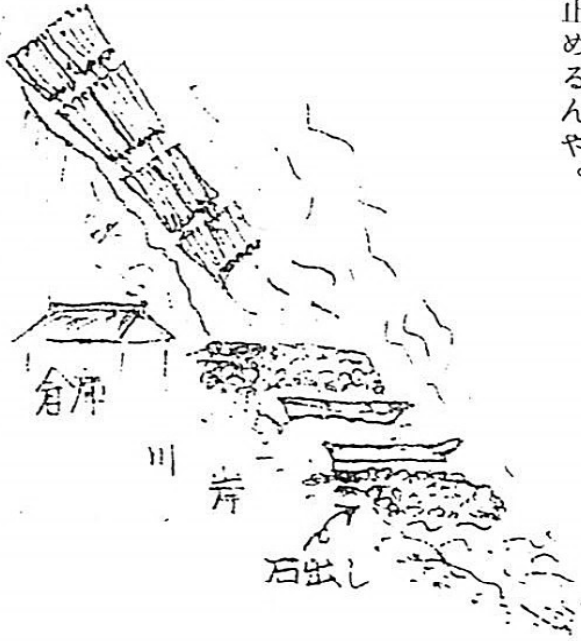
んや。一人は岩など邪魔物があると先頭の方まで走って行って楫棒でこねたり突っぱったりして楫を足で川下へ送り乍ら後ろの方まで楫の上を歩くということになる。

五十波の下の山かけの瀬も難所やった。ここでは事故死された方もあった。

昼がくれば、瀨で楫を流し乍ら權棒かじに腰かけたり、立ったまま弁当を食べるんや。まあ普通なら三時頃には出石いだしまで行ける。小野から五里余りじゃ。(河川距離は二〇・五キロメートルやが実際は二十七・八キロメートルある)

出石は高瀬舟の舟着き場であ、石の提防のようなものが岸から二・三間つき出してある。これを石出しといったので、それがなまって「いだし」となったんやろかい。舟もたくさん止めてあるし、その辺へ楫も止めるんや。

ここで楫を二流れ合
わせて二倍の中(二・四メートル)にする。
そこからは大体一人で流すことが多かった。
残りの者は帰るのだが、何かあって遅くなると平田屋という常宿があってそこで泊ることもあった。



山崎辺まで来ると井堰いせきも大きくなって、中央が切つてある。そこを狙って楫を上手に進めるのや。

「出石から下は高瀬舟が通うので案内川底がなれている。でも船頭さんはちょっとでも川底が荒れたりすると、楫が荒らしたように言つて言い争いが起きたりもした。馬場所川原までくると高瀬舟が十艘あまり繋いである。」金山真治氏

その舟にぶつけんように通さなきゃならん。その下の宇原井を越すとくれめぎの瀬や。「船底をよくめんだで、くれめぎとついたんやろかな。」金山氏

この瀬は一番の難所やった。急流で底をすりながら、その下しもには大きな岩が待ちかまえている。そして右に曲がっている。こんな所は左端の耳木をふみこんで楫棒でつっぱり乍ら楫を右に曲げるのや。あまりふみこみすぎると楫がたくれる。下手をして端はなをひっかけたりしたらそれこそ大変や。楫はぐにやぐに曲がってつぶれてしまう。そうなたら後続の楫を早く止めんとつっこんできたら、それもつぶれてしまう。そんな時は楫棒を上に入れて合図をする。後続のものは後ろに止めて手伝い乍ら組み直すのじゃ。予備のかずらはいつも持っていた。まして人が川にでも落ちたら、それを引き上げて川原のごみを集めて暖を取り乍らかわかすのじゃ。瀬は急流やし、その下は必ず淀んでいる。瀬に楫の先頭が入つた時は、前の方が引っぱるから、うまく流れていくが、瀬から瀨へ入りがけは後ろがつっかけてくるから操作が難しい。まして急に曲がって大岩のあるくれめぎは楫師泣かせじゃった。香山か新

宮まで下れば夕方や。俄を岸にがっちり繋いで香山は田中屋さん、宿しゆく(現猪崎のこと)は小那田屋さんと言う宿やどへ一泊ということになる。何しろ冷たい仕事やから宿に落ちついたら一杯晩酌をやるんやが、これが実にうまい。

下宇原のどうが瀬でも困ったことがある。そこら辺は、よう渡し舟があり針金が張ってあった。曾我井の井でたくれたり、猪崎の鉄橋にひっかけた者もあったなあ。何かあれば井野原(網干屋)・龍野・正条にも泊ることがある。

香山を朝たてば、午後二〜四時頃には網干に着ける。

木材は、旭木材という問屋へ渡して長い旅は終わりということになる。うどん屋へ寄るのも楽しみの一つやった。

わたしら(秋田喜市氏Ⅱ閨賀)がやり始めた頃は昭和の初めやが、かりを入れると木材の無駄ができるので、それをやめ鋸かすがいで止めていた。その頃は高瀬舟もなくなって、俄の一人舞台やが、そのかわり川筋がよう荒れて困ったもんや。流筏組合というものがあって、河川関係の役所へ川を堀ってもらおうよう頼んだりもしたもんや。荷車だけでは運べんから、川も重要な交通路やった。また揖保川の楢師は勇敢で腕が良いということで、鴨緑江ヤール川より指導に来てくれんかというようなこともあった。一時は天鷲絨ビロウドや別珍で制服を作ろうと言うことになって、作って着たこともあった。そのころは閨賀橋下の右岸が貯木場であり楢組み場であった。十五〜六人が組になって請負仕事をやるので、一日一円〜一円三十銭位やったなあ。

網干からの帰りは新宮まで播電という一両三間(六メートル)余りの電車が二〜三両つないで走っていたのに乗って帰った。新宮からは楢棒はかっいで鋸は袋に入れてさげて、一宮や波賀へ歩いて帰るのは、これまた大変なことやった。

なんでそんな重い楢棒を持って帰らんらんかと言うことは、しでの木やちっちゃの木の使いよいのはそうざらにない。この木は水によくなじんで水切れがいいし、実に強いんじゃ。杉や桧では軽くて浮き上がって弱くて使い物にならんじゃ。

帰りに、たまに知った貨物自動車に来て、こっそり乗せてもらったりした時は嬉しかったもんや。

三林まで帰ると山の端にさぬき屋とか、おはっつあん(前田ハツさん)の茶店があつて、一杯飲んだり腹ごしらえして帰るんや。

楢流しも昭和十年頃になると、自動車輸送にとつてかわられ姿を消した。

ところが十九年になるとガソリン不足で自動車も、炭や薪で走らんらん時代が来て、神戸より楢が再開

食品の店

い ま や

目 丁 4 通 り き 通 目
TEL ⑥2 0 1 6 9

したが少しの間やった。

感 謝 状

当支店ニ於テ決戦下陸上輸送ノ難関ヲ打開スルタメ永年中絶ノ揖保川水域ニ依ル流筏作業ノ復興計画ヲ樹立スルヤ貴組合全員一致之ニ参加克ク時局認識、多年練磨ノ特殊技能ヲ發揮シ重要資材輸送ノ目的完遂ニ寄興セラレ是ニ感激ニ不堪

茲ニ昭和十九年度事業終了ニ当リ聊力感謝ノ微意ヲ表ス

昭和二十年六月十三日

兵庫県地方木材株式会社西播支店

支店長 南 光 隆 雄

宍粟郡流送業組合

代表者 秋田 忠太郎 殿

※御教示いただいた方々、ありがとうございます。

流筏関係 秋田喜市氏(M四二) 兵山弁二郎氏(T二)

三辻竹五郎氏(M三四)

その他 下村つるゑ様、讃岐源四郎氏(M二七)

金山真治氏(M三一) 中井丹治氏(T四)

福嶋一二氏(M四四) 菟場忠太郎氏

資料、近畿地方建設局(揖保川)より

特に概については三氏のくわしい体験談をまとめた形で書かせ

てもらいました。



春の研修旅行

志 水 美 好

夏も近づく八十八夜が過ぎてから雨天の日が続き、空模様心配でならなかった。ところが、五月十四日は幸運にも五日ぶりに天候が回復して、もってこいの旅行日和になった。一三六名の全員が早々と集合して居られるのに、肝心のバス二台が定刻になっても現われず、皆様に申訳なくて朝から随分と気をもまされた。予定より二十分も遅れてやっと三台のバスが揃い山崎を出発した。

二月の研修部会では、大阪の四天王寺、一心寺、住吉大社と堺の仁徳天皇陵、藤井寺の見学を相談した。しかし、旅行社に調べてもらうと駐車場がなくて駄目だということになり、別案を作って三月末下見に出かけた。その結果再度計画を変更して今日のコースに決めた事情を一号車の皆様に



は一応話しておいた。交通状況がよかったので自動車は快走し出発の遅れを取戻し、予定より早く住吉大社に到着できた。

広い駐車場に車を停めて一同表参道に向かった。有名な太鼓橋を渡って、摂津国一の宮であり、全国二千余の住吉神社の総本社である神前に額づいた。御社殿は四つの御本宮に分れていて、それぞれが「住吉造」と称される特別の様式で朱塗も鮮やかな美しいお社である。四つのお社に順々にお詣りする。広い境内なので三々五々に別れると人影もまばらな感じだった。宝物館には入って見た。神輿や船絵馬が控の間にあり、本館には秀吉の朱印状などの古文書や軸物、舞楽面と装束、刀剣など立派な宝物が沢山陳列してあった。連れの人々が余り来られないので寂しくなり外へ出た。広い境内には摂社、末社、五所御前、石舞台高庫、六百余基の石燈籠等見所が沢山あるのだが、案内者がなかったせいか、大勢の方が割合早く車へ戻っておられた。

住吉大社を後にして阪和街道を堺市へと向かった。大和川を渡ると堺市だ。程なく南宗寺に着く。ここは駐車場がなく路上駐車のままである。総門をくぐって広い境内を辿る。掃除も行届かず荒れた感じがする寺だ。頼んでいた住職が留守だったので案内者のないまま寺内を一巡することになった。千家一門の墓所があり利休の墓を中心に表千家・裏千家・武者小路千家の墓がひっそりと立ち並んでいる。思ったよりも小さい五輪塔だった。空襲で焼け戦後再建された方丈の前に枯山水の庭があった。古田織部好みの名園だそうだが、説明がなかったのでその良さも分からず通り

過ぎた。方丈の横の実相庵茶室は利休の詫び茶を偲ぶ茶室だとい
うが、戸が閉じたままで見せてもらえない。ましてや、茶室の前
庭にあった利休遺愛の袈裟形手水鉢や、紹鴎遺愛の六地藏石燈籠
に足を止める人は殆んどなかった。重要文化財の仏殿の天井には
狩野信政筆「八方睨の龍」が描かれている。先を急いだ一行に遅
れた私達数人でうす暗い天井の龍を見上げた。

十二時過ぎ南宗寺を後にして阪和街道を南下し、泉大津の松の
浜ドライブインで昼食をとり、一時半頃岸和田城に着いた。ここ
でも駐車場が狭いので市役所横の道路に車を停めて城内へと進ん
だ。

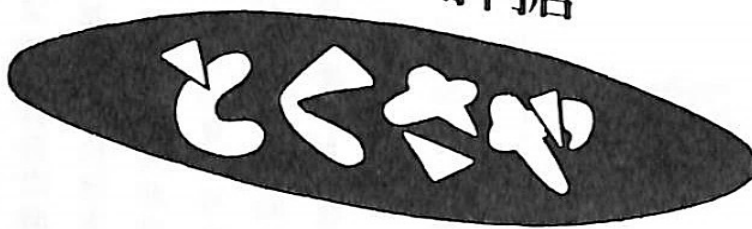
岸和田城は五万三千石岡部氏の居城だった。規模は小さいが本
丸が立派に残っている。高い石垣と深々と水をたたえた堀に囲ま
れた本丸には、復興された三層の天守閣が聳え、角櫓や城壁の白
壁が美しく堀の水に映えている。ここは山崎と旧縁がある。池田
輝澄のあとを受け、寛永十七年松井康映が岸和田から山崎六万石
に転封になっている。岸和田城から山崎へ来なくなかったという
事だが、この立派な城を見ればさもあろうと思われる。天守閣の
一階では時代民俗衣裳展、二階では大名の調度展が開かれていた。
葵の紋のついた徳川家ゆかりの豪華な化粧道具、飲食器、遊戯具
などが私達の目を楽しませてくれた。三階は展望室になっていて
岸和田の市街が一望できたし、遙か西の海上では関西新空港の工
事も望見できた。天守閣を急いで降りて、角櫓の郷土資料館を見
学した。折よく茶道具展が開かれていて六〇点ほどの各種の茶道

具が展示されていた。千利休筆の茶掛、沢庵和尚作の茶杓をはじ
め、各種の茶碗等名品が揃っていて、心ある方にとっては見あき
しない一刻を過ごされたことと思う。名残を惜しみつつ岸和田
を去り貝塚市へと向かった。

三十分程走って東の郊外にある水間観音さんに到着。この水
寺は聖武天皇勅願といわれる古い由緒をもつ寺である。すぐ東
も横も蕎原川の崖に面していて境内は余り広くないが、本堂、
山堂、三重塔、愛染堂などが建ち並んでいる。立派な本堂と三
塔は共に岸和田藩主岡部氏によって文政年間再建されたものだ。
大勢の参拝者でなかなかの

賑わいである。境内にお夏
清十郎の墓があるのでつい
でに立寄った。姫路のお夏
清十郎と名前は同じだが人
物も系歴も全然別人のよう
である。さすがに旅疲れさ
れたか皆さん早目に車へ戻
って来られる。今回の予定
コースが無事終って三時二
十分帰途についた。
道中、のど自慢や世間話
に花を咲かせ乍ら一同恙な
く午後七時半山崎へ帰った。

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)
☎(0790)62-1680代

行きなれた京都・奈良と違って、大阪・泉南方面は訪れる機会が少ないので、私にとっても初めての所ばかりでよかったです。その上皆様のご協力で集合時間にロスもなく、予定時刻より早く帰着できたことを感謝しております。

吉田松陰

安井清介

NHK歌謡パレード'89で最近、歌手尾形大作さんが「吉田松陰」を歌っているのを見ました。私の最も尊敬する人物は「吉田松陰」「坂本竜馬」「福沢諭吉」の三人です。この三人はずっと以前から尊敬しておりました。福沢諭吉先生は一万円札に登場されたからではありません。或国の大臣方は口では国の為と言い乍ら私利私欲に溺れ、ロッキード、リクルート等国民を欺く事件を起しながら執拗に自分を保持することばかりを考えています。恥を知る男なら即刻議員を辞職すべきでしょう。松陰先生は無欲無限の若者達を育くまれました。国民を困惑させる消費税を課している大臣様などは全く尊敬いたすことはできません。

歌は世相を反映すると申しますが、現在では演歌などといって所謂流行歌は時代の流れをよく現わしています。何故「吉田松陰」が今歌われるのでしょうか。赤心の一かけらもない政治家に警鐘を打ち鳴らしているように思えます。

吉田松陰先生は、天保元年（一八三〇年）八月四日、長門の国萩の東郊松本村（現在は萩市内）に生まれ、父は杉百合之助常道という毛利藩士で母を瀧といった。兄は梅太郎といい松陰先生は二男でした。先生が五才の年、叔父（父の弟）の吉田大助賢良が大病になり後継ぎがないので養子にきまり、翌年の夏、叔父が逝去して吉田家を継ぐことになった。それまでの名は虎之助でしたが、叔父の家を継いでから大次郎と改め、成長の後にも松次郎とか寅次郎とかに改めました。

叔父大助も杉家から吉田家へ養子に入った人で、吉田家は代々山鹿流兵学の師範役として

毛利藩に仕えた家柄でした。

叔父の家督を継いだ上は、

松陰も当然兵学教授となる

運命になっていた。そのた

め六才の松陰先生は一生懸

命に勉学に励んだ。吉田家

には松陰先生の義母（大助

賢良の未亡人）があつたが、

まだ二十才の若い母だった

ので、母は実家（萩城外黒

川村の豪農）に引き取られ、

先生は実家の父母の許で成長することになった。杉家

外科・内科

山 中 医 院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL⑥20036

— 本のある生活を —

さつき書房

山崎町鹿沢 55-3
☎ (0790) 62-4674

は微禄の上、先生の祖父七兵衛常德の代に萩の火事で類焼し甚だ窮乏した。けれども祖父は武士として立派な態度の篤実な人で、親戚故旧に対してはよく真実を尽くした。長男の百合之助（松陰先生の父）が漸く六、七才になった頃からは、藩の役人になって城中に住むことになり妻（先生の祖母）一人家において子供の教育から家事一切を担当した。貧乏の上に百合之助のほかに弟の大助文之進という三人の男の子と一人の女兒があるのによく家を齎（あ）え子供を教育した。杉家の美風はこの祖母に基づくとも言われている。大助は山鹿流の師範家を継ぎ、文之進（玉木）は郡奉行の職に

つき、後年乃木大将がこの人の薫陶を受けたことは有名である。長男である父は第二人を十分に学問させる為に最も苦労した。父百合之助が二十一才の時、祖父が歿して家督を継ぎ、その翌年松本村に借家をついて移り松陰先生はここで生まれた。すぐれた人物であった祖父や父母に養育された松陰先生はやがて拔群の学問見識をもった人物に成長することになった。松

陰先生が度々罪を受け一家中少なからず難儀に陥ったが、些かも憂愁の様子を示さず寧ろ国の為に身を捧げて悔いなき志を喜んでこれを激励して止まなかったといわれている。

松陰先生の幼年時代に手塩にかけて学問を教えたのは、叔父本文之進であった。妻を迎えるまでは杉家に同居していて兄百合之助と共に辛酸を嘗めながら学問にいそしんだのである。天保三年、松陰先生十三才の時、自宅に松下村塾を開いて松本村の少年を教育し始めた。松下とは松本（松のもと）のことで、村の少年を訓陶して村風を作興しようと思図したのであった。後年松陰先生の松下村塾も叔父の志を継いで始められたのであった。文之進は明倫館の都講（教官の一種）になり順次累進して終に郡奉行にまでなった。この叔父が松陰先生の幼少の時から死に至るまで恩愛の義父の如くまた嚴師であった。先生の恩師の数は随分多いが、その感化の大きかった点に於て文之進は父母に次ぐ者であった。明治九年、前原一誠等による萩の乱を起し、門弟にもその乱に加担したものがあつたのでその責任を感じ十一月六日先祖の墓前で割腹した。年六十七才であった。吉田松陰はこのように立派な実父母、叔父、養父、兄弟妹に囲まれて成長していったのである。

天保十一年、先生十一才の時、藩主毛利敬親の前で「武教全書」の講義をした。十二才の時から馬術の師範につき、十五才の年には養父大助の高弟で兵学者として名の聞えた山田宇右衛門頼毅よりたけという先生に從学し、また長沼流の兵学者山田亦介にも入門した。

飯田某に西洋陣法を習い、守永某に萩野流砲術の伝授を受け、山鹿流兵学は林真人の内弟子となって研鑽した。

嘉永元年正月、先生は十九才になって独立の兵学師範となった。この年先生の家は現在の松下村塾の場所に移転した。翌嘉永二年六月、藩命により海防掛と共に日本海岸から下関までの海岸巡視をした。また嘉永三年八月下旬には九州へ旅行し長崎及び平戸島を視察した。九月十四日平戸に着いて十一月六日まで平戸に滞在して夥しい収穫を得てその年の大晦夜の九時、吾が家に帰り着いた。

嘉永四年三月五日、松陰先生二十二才、藩主の参勤と具に江戸へ向かい四月九日江戸に到着した。このことは「東遊日記」に詳しく書かれている。先生は道中からも数度家郷に手紙を出し、江戸に来てからは絶えず近況を父、叔父、兄などに手紙を出している。七月二十日には佐久間象山に入門した。十二月十五日東北遊歴の爲藩邸を後にした。水戸では尊王攘夷思想の指導的人物であった金沢正志翁、藤田東湖、豊田天功等に会ってその高見を承り感銘を受けた。翌嘉永五年正月二十日水戸を後にして会津、新潟、佐渡、秋田、弘前、青森、盛岡、仙台、米沢、日光等を歴遊した。奥羽諸藩の藩士教育の状況を視察する爲、常陸笠間藩の学校、会津の日新館、弘前の稽古館、仙台の養賢堂、足利の足利学校を訪ね直接参観するか学頭に会ってその教育の仕方を探っている。「人物養成」の必要を痛感していた先生はその見聞の結果、教育ということが如何に重大な意義をもつものであるかを益々強く感

じた。他日先生が松下村塾を始めるについて、或は学校や藩士の教育を論ずるについてこの旅行は着眼点、理解力、観察力、洞察力を鋭くする上で非常に大きな収穫となった。先生達は四月五日、約三ヶ月半の旅を終えて江戸に帰りついた。四月十八日「帰国して命を待て」という命を受けて江戸を立ち五月十二日萩に着いた。十二月になって漸く罪が決まり、士籍を削られ世禄を召上げられた。先生が萩に帰るとその学問と人物とを尊敬する若者達が多く集まってくるようになった。藩主毛利敬親はかねて松陰先生の将来に期待をかけ、修業を励ましていたが国法を紊したことに就いて「国の宝を失った」といって嘆息したほどであった。この青年を徒らに蟄居させておくのは残念だと考えて特に父百合之助に内諭して十年間の諸国遊学を願い出させた。

明くる嘉永六年、先生二十四才の正月二十六日萩を出発して東遊の途に上った。二月十日大阪に着き和流砲術家坂本鼎齋、硯儒後藤松陰、藤沢東畝、大和五条の森田節齋、大和八木の谷三山を訪れ、郡山、奈良、伊賀上野から津に出て松阪を経て山田へ行き伊勢神宮に参拝し、神宮の足代弘訓の話聞きそれから津へ引返して斎藤拙堂とその門下等に会った。五月十二日、桑名で藩校立教堂、大垣では藩校敬教館の話聞き十八日松本、十九日塩尻、二十日小諸、二十一日軽井沢、二十二日熊谷、二十三日蕨、二十四日板橋、白山を経て、かつて藩邸の道場で剣術を習った斎藤弥九郎という剣客を三番町の道場に訪れた。ここには桂小五郎を初め毛利藩士が幾人も居った。桶町の鳥山新三郎の塾に寄宿して藩

邸の役人へ出府の届けをした。翌日鎌倉瑞泉寺の住職、母瀧子の兄、禅僧の竹院を訪ねた。六月朔日、鎌倉を立てて江戸へ帰り三日佐久間象山の塾を訪れた。翌日もまた佐久間の塾に出かけたが途中桜田の藩邸に立ち寄って黒船が四隻浦賀へ来たという話を聞いた。鳥山の塾に帰って兵学を講じていたが、浦賀の騒動の噂が頻りに入るので自分も出かけることを決めた。五日午前四時、鉄砲洲から舟を僦い午前十時品川に着いた。上陸して川崎、神奈川を経て程ヶ谷に至り、金沢の野嶋からまた舟で大津に行き浦賀に午後十時頃到着した。六日の朝は海岸へ出て見た。幕府からは大名に防戦の用意をせよというおふれが出た。八日は附近の海岸一帯を見て廻った。九日には久里浜で国書贈呈式が行われたので、先生はこれで事が落着いたと思つて、その夜浦賀を発ち十日の午後江戸へついた。天下の憂国の志士は、晏然として幕府の対策を見てゐるわけにいかず愛国的言動を明白に表白し始めた。西洋兵学研究の為、佐久間象山に従学した先生は同門の小林虎三郎と並んで「象門の二虎」と呼ばれるようになった。郷里の兄に宛てた手紙には詳しく当時の情況が書かれてゐるが、紙面の都合で掲載を省略します。先生は一介の浪人となつたが、藩主に「将及私言」「急務條議」と題する論文を呈出した。

嘉永六年九月十八日、先生は長崎旅行の途についた。それはジョン万次郎が米国から送還されたが、禁錮が解かれ通訳官に任用された。時勢はこのように変化してきていた。象山先生は海外渡航について松陰先生にそれとなく日本脱出の方法を話していた。

漂流という名目なれば帰朝しても外国の事情を知る者として扱われると思つた。丁度今長崎にプチャーチンのロシア船が来ているのでこの軍艦で漂流しようと思つたのである。江戸を發ち十月朔日京都に着き梁川星巖を訪れた。大阪から舟で周防へ、上ノ関から十六日豊後の鶴崎についた。阿蘇から十九日熊本に着いた。宮部と共に横井小楠先生を訪れた。二十五日熊本を發ち舟で島原へ渡り、二十七日長崎に到着した。だがプチャーチンの軍艦は長崎を去っていた。十一月朔日長崎を後にして十一日下関の赤間関に着き翌日萩へ歸つた。十四日毛利藩も浦賀警備のため出兵すべし幕命を受けていた。宮部がやってきて、十一月二十六日周防富海から舟に乗った。十二月三日大阪に着いた二人は翌日京都に入り八日まで滞在して、梁川星巖、梅田雲濱や水戸の鶴飼吉左衛門等の志士を訪ねて形勢を聞いた。十二月二十七日江戸に着き嘉永七年は安政となり元日の夜、兄梅太郎が浦賀警備の用務で藩邸に着いたという報を聞いたが、藩邸の出入を禁じられてゐる先生は行くわけにはいかなかった。七日には宮部と相模海岸を視察に行つた。日記をつけたり手紙を書く暇もなかつた先生は二十七日になつて初めて父に手紙を書いた。

三月三日和親条約が調印された。先生は国家の為に尽くすことは米艦に便乗して米国へ潜航することであると考へた。同藩の足輕金子重之輔と行動を共にすることになった。この日桃の節句、江戸の桜花は満開で向島へ鳥山新三郎、吉田憲次郎、宮部鼎蔵、永鳥三平、梅田雲濱、金子重之輔を始め長州、肥後、出羽等の青

年志士十数人が花見に行った。一日の行楽を終えて夜には鳥山の塾へ帰った。翌四日は窪邸に兄を訪れた。暫く鎌倉の伯父の所に隠栖して勉学したいと暇乞いに來たと偽って永訣の挨拶に代えた。五日には京橋の料亭に自藩及び熊本藩の友人達八人ばかりが会した。その席上で先生は潜航のことを発表した。可否の討論が始まり意見は容易に決しなかった。どうせ成功はしない、結局碌になるだけだと友人達は心配した。すると永島三平は「勇銳力前は吉田君の長所だ。色々取越苦勞をして自重を勧めた所で聞くまい。」と言った。夕方になり先生は友人達に永訣を告げて宿に帰り、大急ぎで金子と準備を始めた。その夜は雨であった。夜明け前程ヶ谷に着いて一泊した。十時頃起床して、米艦へ行った時の依頼状をかいた。次の日象山に見せて少し添削してもらった。八日は本牧の海岸へ行った。米艦に近づいた場合の方策を工夫し、象山と別盃を重ねて一旦程ヶ谷の宿に帰った。薪水積込みの官舟に乗って米艦に近づく方法を象山から教えられたが、二日後れた為に駄目になった。この方法をとっていたら或は成功していたかも知れなかった。金子は「どうせ、危険を冒さねば成功しないのだから、今夜は舟を盗んで直ちに米艦へ押しかけよう。私は少々舟が漕げる。」というので「よかろう。」という事で浜辺を探していると二艘の小舟があった。喜んで宿へ帰り「今夜江戸へ帰る。」といって神奈川から夜の零時頃に例の所へ行ってみると小舟はどこかへ漕ぎ去られてなかった。十一日も十二日も無為に終り、米艦はどうやら下田へ行くらしい事が分かったので、鎌倉、小田原、熱海、

伊東と泊りを重ねて十七日下田へ向かった。海上を米艦二隻下田へ向かっているのが見えた。午後下田に着いてみるとその船が港口に碇泊していた。安政元年三月十七日、伊豆下田の旅館岡本屋に二人は泊った。この時の二人の宿での様子は詳しく述べることには省くが、十日ばかり逗留して二十一日にはペリーが来て、六隻の米艦が沖の方へ列んで碇泊した。最も近いのがミシシッピー、次がポーパタンであった。二十五日海岸を彷徨している中に夜になった。午前二時、川口に小舟があったのに乗って海へ出たが、波が高くてミシシッピーは遥かに遠くて漕ぎつける見込みがないので、一応岸に上って再挙を謀ることにして、柿崎弁天の祠に入って一睡した。その後漁家に入って食事をしたり、下田へ通じる道の一軒家に頼んで泊り、二十七日、海岸へ行って十時頃まで寝て、午前二時、愈々舟で乗出した。幾度か舟はグルグル廻りをてやつと苦勞の末ミシシッピーの舷側に漕ぎ付けた。漢文で「等米利堅に行かんと欲す。君幸に之れを大将に請え」と認めたまもって話したが、通ぜず米人はポーパタンにペリーが乗るので行けというので元の舟でまた一町ばかり漕いで、辛うじてポッパタンの外面についた。舟は米人に突放されて刀も荷物もに残されたまま、波にさらわれて行った。二人は艦上にあがり「米利堅へ行きたい。拙者等は既に国禁を犯しているのだかられば死刑だ。何としても連れて行ってもらいたい。」と日本語を解するウイリヤムスという男に何度懇願しても聞き入れてもらえなかった。行けぬとなると流れた舟に残した荷物が拾われたら忽ち

二人は探索されるので、どうしたらよいかと相談をかけると「今ボート君等送る。水兵探すこと命ずる。心配ない。」といったが、水兵等は真直に陸へボートを着けてしまった。ボートは帰って行き小舟は全く行方が知れなかった。もうこうなつては如何ともすることができない。どうせ捕縛されるならむしろ自首するに如かずと、下田番所へ行き囚人となった。檻房は畳一枚敷の狭いものであった。

四月十日、江戸から役人が来て江戸へ送られることになった。十五日、江戸北町奉行所に到着した。泉岳寺の前を過ぐる時「かくすればかくなるものと知りながら、己むに己まれぬ大和魂」と詠じた。伝馬町の獄に入れられこの挙を失敗すれば磔だと観念していたが、萩に送還し実父の許で謹慎せしめるということになった。九月十八日、藩の役人によって萩へ送られ十月二十四日に到着した。「実父の許で謹慎」ということであつたが野山獄へ投じられて金子は獄中で死んだ。獄中の先生の様子も詳しく述べたいが省略します。同囚の者同志で修業会を作つてお互いに勉強し合つた。その頃安芸の勤王僧月性が萩にやってきて松陰先生の家にも来たので、兄を介して手紙の往復をし大いに勤王攘夷について論じた。先生が『孟子』の講義を初めると番卒も格子の外で聴き入り、やがて司獄（今の刑務所長）までも先生の講義を受け、終に門弟となつた。戒師が囚人に講話して感化したという話は当り前であるが、刑務所長が囚人の門弟になつて大いに感化されたという話は比類のないことと言われている。福川司獄はやがて弟も

連れてきて松陰先生に入門させた。父母も兄も叔父も、よく先生の至誠憂国の志を知つていたから、少しも小言などは言わず益々修養して君国のため身命をととして働くよう奨励した。兄妹の手紙も残っているが詳細を省略する。ただこの一族が厳格である一方に例えようのない細やかな情愛に満ち溢れていることを付記する。特に妹に与えた手紙には松陰先生の人間としての情愛が滲み出ている。松陰先生は入獄した日から『野山獄読書記』をかき安政元年十月二十四日から翌年十二月までに実に六百十八冊にものぼつている。

安政二年（先生二十六才）十二月十五日、「病氣療養」という名目で出獄を許され、父の家へ帰ることができた。先生を入獄させたことが藩内の有志や天下憂国の士の間に問題となり、先生の獄中に於ける態度は誠に立派であり、わけても同囚を感化して獄風を一変させたという功績もあつて出獄が許された。出獄の翌々日の夜から杉家では、父、兄、外叔久保翁等を聴衆とする先生の孟子講義が始まつた。『講孟余話』が翌年六月に完成した。九月になつて外叔久保翁の依頼により「松下村塾記」を作つた。先生は四畳半の幽室に謹慎の身を置いていたが、増野徳民、伊藤利介（後の博文）吉田栄太郎（三條池田屋で新撰組に襲われて落命）杉浦洞（後の勤王志士）等が入門した。安政四年正月、先生は二十八才、小田村伊之助（妹婿で藩の儒官）久保翁の長子清太郎、富永有隣と四人で協力して村塾を興す計画を立てた。先生は謹慎の身で塾主になるわけにいかぬので、久保翁の新塾という名義にして塾師

は富永有隣ということになっていた。しかし先生が実際の経営者であり主任教師であったことは云うまでもない。高杉晋作も入門した。その中に塾徒の数も殖え寄寓する者も多くなったので、八畳の客間と先生の幽室では不便が多く、塾舎を造ることになり屋敷の一隅に古材木で八畳一間の家を建てた。安政四年十一月、松下村塾の塾舎が初めて出来た。久坂玄瑞も入門し先生の末妹と結婚し杉家に同居して先生の助教をした。安政五年三月、更に古材木で増築した。この頃、日米通商条約問題が轟々たる世論を巻き起し始め、先生は「対策」「愚論」等の論文を草して開港論を唱えた。藩主毛利敬親が帰城し藩政の革新を断行して尊王攘夷の藩是を確立する陣容を整えた。藩府の首席益田弾正は松陰先生から兵学を教わったこともあり、先生が藩府に献策した論文を藩主に見せた。先生の時流を抜いた名論卓説がこの頃から特に目立って多くなった。松下村塾の教育は益々力が入っていた。久坂玄瑞に送った手紙にはその様子が詳しく書かれているし、門人達が先生について語った事については高邁な風貌を知ることが出来るが省略する。安政五年七月二十日、藩庁から「家学教授のため門人を引見するを許す」という恩命があり、松下村塾は公許を得て公然と先生が塾師として立つことが出来るようになった。尊王攘夷運動は益々激しくなり門下の中堅は既にこの運動に参加していた。

大老井伊直弼は所謂「安政の大獄」を行い橋本左内、頼三樹三郎、梅田雲濱等五十余人等を捕え、吉田松陰も老中間部詮勝を要撃しようとしたことがあらわれて捕えられ野山獄に投せられた。

安政六年五月十六日、江戸送りが決って二十五日江戸藩邸についた。七月九日、幕府の評定所へ召出され吟味の上再び伝馬町の獄に入った。幕府の訊問に対し先生は高官に対し国策の建て方について意見を述べた。奉行達が自分の至誠を認めてくれるものと考えて、間部老中要撃のこと、大原重徳郷を長州に招いて勤王攘夷の旗挙げを計画したことを陳述した。この為無罪ではすまされぬこととなった。自分の信念を陳述して少しでも幕府を反省させた一心であった。二ヶ月を経た九月五日再吟味、更に一ヶ月経って十月五日第三回の呼び出しがあった。二十日にはいよいよ死罪は免れないことを知り、父と叔父と兄に宛て永訣の書を認めた。

親思ふ心にまさる親ごころ

けふの音づれ何ときくらん

まことに悲壯、一字一涙の永訣書であった。先生は門人にも刑死後の一切のことを依頼し同志一般の為に『留魂録』を成して全く思い残すことはなかった。二十七日朝、評定所へ呼び出されて死罪の宣告があり、伝馬町の獄に送られた。処刑されるに当り辞世として詩歌一首を大音声に三返押し返して朗誦し、庭に引出されて遂に斬られ三十才の生涯を閉じた。

我今為国死 我れ今国の為に死す、

死不負君親 死して君親にそむかず、

悠悠天地事 悠悠たり天地の事、

鑑照在明神 鑑照明神にあり。

身はたとへ武蔵の野辺にくちぬとも 留め置かまし大和魂

井伊大老のこの弾圧は、かえって天下の志士を憤起させ翌万延元年三月三日、桜田門外に於て水戸の浪士によって暗殺された。

その後幕府はいよいよ衰亡し、七卿の都落ち、蛤御門の戦、長州征伐等を経て十五代將軍徳川慶喜は慶応三年大政を奉還し王政復古の大業が成就した。

七月十四日夜十時三十分からNHK歴史誕生「北の宝の海をめざせ田沼意次の蝦夷探検隊」を見たが、十八世紀半ばロシアはカムチャッカから千島列島を南下食糧補給のため、日本との交易を望み厚岸に上陸して松前藩に通商を求めた。豊かな北方に目を付けた老中田沼意次は蝦夷を開発し、ロシアとの交易をめざした。ロシアは「ラッコ」の毛皮を求めて、またアメリカは太平洋の鯨を追いわが国に補給基地を求めてきたことを解説していた。間宮海峡を発見した間宮林蔵の未地への探究心と松陰の心とは相通ずるものがあることを痛感した。

「吉田松陰」の歌と私の「長州の華」と題した作詞を掲載させていただきます。

長州の華

作詞 安井清介

一、 風に打たれし 野山獄

雪二度降りし 伝馬獄

華は嵐に 散り落ちるとも

留めおかまし 留魂録に

遠く長州親心

二、 武蔵の野辺に 身はたとえ

朽ち果つるとも 新芽萌ゆ

萩の郷なる 松下村塾

心耕す 若者達の

曙燃ゆる 指月城

三、 尊王攘夷 開国と

風雲告ぐる 幕末の

大獄なんぞ 鑑照明神

暁招く 長州の華

あゝ偉大なり 吉田松陰

吉田松陰 (尾形大作)

作詩/星野哲郎

作曲/浜口庫之助

編曲/山田良夫

前奏 14 小節



一、時と命の 全てを賭けた

吉田松陰 憂国の

夢 草莽に 果つるとも

松の葉は 久坂に宿り

花は桂の 枝に咲く

間奏 7 小節

二、口で言うより 行うことが

志士の志士たる 誇りなら

かくこの罪の 踏海忌

下田港の 弁天島の

波も讀える 男意気

間奏 10 小節

三、何も持たない 若者たちの

無欲無限の 赤心が

日本の明日を 創るのだ

松下村塾 長州魂

いまも生きてる 萩の町

(二分四六秒)

星野 哲郎作詩
浜口庫之助作曲

吉田松陰

Fm C7 Fm
 ときといのちの すべてをかけた
 Fm Eb D# C7
 よしだしょういん ゆうこくの
 Fm Fm#A# B#m C7
 はつるとも
 B#m D# C7
 ゆめそうもうに くさかにやどり
 Fm C7 Fm
 まつのしずくは えだにさく
 Fm Gm7-5

宗門人別帳

(現山崎町上ノ下の場合)

古文書研究会

江戸時代一貫した切支丹信仰禁止策として各寺院が個人ごとに檀家である証明をして毎年役所に提出するという宗門改めが実施されていた。宗門改帳が残っている村は少なくなつたが、今回は山崎町上ノ・内海寿一氏文書の中にあつた安政五年(一八五八)の『上ノ村下組人別宗門帳』を紹介する。徳王寺と極楽寺の二ヶ寺が村内各戸ごとに持高、戸主、年令、家族数をあげ、その人達が同寺の旦那であつて、切支丹でないことを証明している。紙面の都合で安政五年のみを紹介し、前後の年代の家数人数等を表に示す。

安政五年年

播州宍粟郡

上ノ村下組人別宗門帳

三月

安政五年年三月

真言宗人別帳

上ノ村下組

一、真言宗徳王寺旦那持高式石五斗壹升五合

(庄屋)

弥右衛門

当午五十五

ノ七人 内 男四人 女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高式石六斗六升四合

年寄

茂平

当午六十七

ノ五人 内 男四人 女一人

一、真言宗徳王寺旦那持高九石五斗四升七合

伊右衛門

当午六十二

ノ六人 内 男三人 女三人

牛一疋

61570号

一、真言宗徳王寺旦那持高六斗三升壹合

幾右衛門

当年六十七

ノ六人 内 男貳人
女四人

一、真言宗徳王寺旦那持高九石壹斗六升八合

伝左衛門

当年六十四

ノ七人 男六人
女壹人 牛一疋

一、真言宗徳王寺旦那持高七斗四升七合

久左衛門

ノ五人 男四人
女壹人 牛一疋

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石五斗壹合

八三郎

当年五十四

ノ壹人男

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石貳斗三升七合

栄蔵後家

てる

当年五十二

ノ四人 内 男壹人
女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高貳石四斗九升八合

安治郎

当年六十七

ノ貳人 内 男壹人
女壹人

一、真言宗徳王寺旦那持高壹斗五升貳合

六三郎

当年八十七

ノ壹人男

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石九斗八升五合

栄吉

当年六十六

ノ六人 内 男四人
女貳人

一、真言宗徳王寺旦那持高貳石三斗九升壹合

十治郎

当年六十一

ノ四人 内 男貳人
女貳人

一、真言宗徳王寺旦那持高五斗五升六合

和兵衛

当年四十八

ノ三人男

一、真言宗徳王寺旦那持高四石六斗四升七合

友三郎

当年三十九

ノ九人 内 男三人
女六人

一、真言宗徳王寺旦那持高三斗六升四合

安左衛門
当年四十五

ノ五人 内 男貳人
女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高八斗七升六合

伊蔵
当年三十七

ノ六人 内 男四人
女貳人

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石七斗八升三合

吉五郎
当年六十六

ノ七人 内 男三人
女四人

一、真言宗徳王寺旦那持高四斗七升

孫兵衛
当年五十九

ノ五人 内 男貳人
女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高四斗四合

健蔵後家
とら
当年六十八

ノ壹人女

一、真言宗徳王寺旦那持高四斗六升八合

卯兵衛
当年三十七

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石四斗六升六合

貞蔵
当年六十六

ノ三人 内 男貳人
女壹人

ノ三人 内 男貳人
女壹人

一、真言宗徳王寺旦那持高貳石五斗七合

林蔵
当年五十五

ノ四人 内 男三人
女壹人

一、真言宗徳王寺旦那持高貳斗八升四合

辰之助後家
とよ
当年六十八

ノ貳人女

一、真言宗徳王寺旦那持高貳石六斗六升貳合

幾治郎
当年五十一

ノ六人 内 男三人
女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石貳斗壹升貳合

元五郎

当午五十九

四人 内 男三人
女一人

一、真言宗德王寺旦那持高三斗四升壹合

富藏
当午四十九

三人 内 男一人
女二人

一、真言宗德王寺旦那持高壹斗六升五合

庄五郎跡

ふみ
当午五十一

一人 女

一、真言宗德王寺旦那持高壹石貳斗貳升三合

林之助

当午六十四

一人 男

一、真言宗德王寺旦那持高七斗貳升四合

栄治郎

当午四十六

三人 内 男一人
女二人

一、真言宗德王寺旦那持高貳石貳斗壹合

広左工門

当午五十二

五人 内 男一人
女三人 牛一疋

一、真言宗德王寺旦那持高四斗四升貳合

菊右工門
当午六十

五人 内 男一人
女四人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石貳升四合

八藏
当午六十九

一人 男

一、真言宗德王寺旦那持高貳斗壹升八合

安五郎

当午七十三

貳人 内 男一人
女一人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石六斗貳升八合

和藏

当午廿九

貳人 内 男一人
女一人

一、真言宗德王寺旦那持高八斗七合

熊藏

当午四十九

七人 内 男四人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石貳斗五升

銀藏

当午六十一

六人 内 男四人
女式人

一、真言宗德王寺旦那持高九斗七升壹合

兵藏

当午四十九

六人 内 男三人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石五斗五升貳合

久藏

当午五十五

四人 内 男三人
女壹人

一、真言宗德王寺旦那持高五斗六升九合

太藏

当午五十五

式人 男壹人
女壹人

一、真言宗德王寺旦那持高三斗九升

市藏

当午三十四

三人 内 男式人
女壹人

一、真言宗德王寺旦那持高三斗貳升九合

与八郎

当午六十七

壹人男

一、真言宗德王寺旦那持高四斗壹升壹合

喜右工門跡

はな

当午廿二

式人 内 男壹人
女壹人

一、真言宗德王寺旦那持高八斗五升

常助

当午五十六

壹人男

一、真言宗德王寺旦那持高壹石五斗貳升四合

力右工門

当午五十五

式人男

一、真言宗德王寺旦那持高五石六斗六升四合

佐太郎

当午五十

七人 内 男四人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石九斗壹合

平吉

当午六十五

三人 内 男式人
女壹人

一、真言宗德王寺旦那持高四石壹斗八升三合

治平
当午四十一

五人 内 男三人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高三石壹斗七升四合
直左工門
当午四十二

五人 内 男三人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高四石五斗八升貳合
利吉
当午六十二

五人 内 男三人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石壹斗貳升七合
源治郎
当午四十九

貳人男

一、真言宗德王寺旦那持高壹石三斗六合
寅藏
当午五十四

貳人男

一、真言宗德王寺旦那持高四石貳斗三升四合
荣吉
当午廿二

五人 内 男三人
女三人

一、真言宗德王寺旦那持高八斗六升五合
龜藏
当午四十三

四人 内 男貳人
女貳人

一、真言宗德王寺旦那持高四升四合
茂藏
当午廿五

貳人男

一、真言宗德王寺旦那持高壹石七斗四升三合
与三郎
当午三十六

四人 内 男貳人
女貳人

一、真言宗德王寺旦那持高
太左工門
当午三十七

三人 内 男貳人
女壹人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石八斗八合
平口跡統人
弥太郎
当午四十三

弥太郎
当午四十三

四人 内 男貳人
女貳人

一、真言宗德王寺旦那持高壹石壹斗七升六合

角蔵
当午四十一

三人 内 男貳人
女壹人

一、真言宗徳王寺旦那持高五斗壹升五合

仲蔵後家

いま

当午三十一

貳人女

一、真言宗徳王寺旦那持高貳石七斗六升五合

米蔵

当午四十二

七人 内 男四人
女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石六斗三合

磯松

当午五十五

九人 内 男四人
女五人 牛一疋

一、真言宗徳王寺旦那持高四石五斗貳升四合

弥四郎

当午廿七

五人 内 男貳人
女三人

一、真言宗徳王寺旦那持高壹石七斗六升五合

神主

立石佐渡
当午廿七

八人 内 男五人
女三人

播州船越山南光坊末流

一本山流修験道持高壹升八合

利性院

一、真言宗徳王寺旦那

利性院女房

美恵

四人 内 男三人
女壹人

人別合貳百五拾八人内
男百四拾六人
女百拾貳人

家数合六拾三軒

牛七疋

右之者当寺 那に紛無御座候。御法度之切支丹宗門ノ由脇より
訴人御座候ハハ何方迄も拙僧罷出急度申扱可仕候。若旦那ヲ替り
申もの有之候ハハ其旨庄屋年寄五人組へ早速可相断候。為後日ノ
御請判仍テ如件

真言宗播州宍粟郡船越山瑠璃寺末寺

同州同郡中ノ村

見照山

徳王寺

安政五年

三月

白石忠太夫様

御役所

安政五年年三月

浄土宗人別帳

上ノ村下組

一、浄土宗極楽寺旦那持高六石壺斗三升四合

(百姓総代)

源左工門

当午五十七

ノ七人 内 男五人 女貳人 牛一疋

一、浄土宗極楽寺旦那持高八斗四升三合

庄九郎

当午三十二

ノ三人 内 男貳人 女壺一人

一、浄土宗極楽寺旦那持高三斗八合

岩吉

当午六十三

ノ壺人男

一、浄土宗極楽寺旦那持高五斗九升

態之助

当午四十四

ノ五人 内 男貳人 女三人

一、浄土宗極楽寺旦那持高九升七合

治右工門後家

いそ

ノ壺人女

一、浄土宗極楽寺旦那持高壺斗九升七合

善右工門

当午四十六

ノ五人 内 男壺一人 女四人

一、浄土宗極楽寺旦那持高壺石壺斗六升貳合

松五郎

当午五十六

ノ貳人 内 男壺一人 女壺一人

一、浄土宗極楽寺旦那持高八斗三升七合

文左工門

当午六十三

ノ三人 内 男貳人 女壺一人 牛一疋

一、浄土宗極楽寺旦那持高壺石壺斗九升七合

八藏後家

〆老人女

一、浄土宗極楽寺旦那持高式斗三升壹合

ろく
当午五十三

九兵衛

当午三十四

〆老人男

一、浄土宗極楽寺旦那持高四斗七合

弥助

当午四十八

〆三人 内 男貳人 女壹人

一、浄土宗極楽寺旦那持高五斗壹合

直次郎後家

ろく

当午五十一

〆四人 内 男貳人 女貳人

人別合三拾六人内 男拾九人 女拾七人

家数合拾三軒 牛貳疋

右之者当寺旦那二紛無御座候。御法度切支丹宗門ノ由脇より訴人御座候ハハ何方迄も拙僧罷出急度申扱可仕候。若旦那ヲ替り申もの有之候ハハ其旨庄屋年寄五人組へ早速可相断候。為後日之御請判仍テ如件

浄土宗播州神吉浄楽寺末寺

同州穴栗郡中ノ村

極楽寺

安政五年年

三月

白石忠太夫様

御役所

惣人別合貳百九拾四人内 男百六拾五人 女百貳拾九人

惣家数合七拾六軒 牛九疋

村高百三拾四石壹斗三升八合

右ハ上ノ村下組当午年宗門人別御改ノ儀村中大小ノ百姓地借子供召仕ノ男女ニ至迄老人も不洩様宗旨相改候処御法度宗もの無御座候。尤切子丹転候類又ハ先祖類族ノ親類縁者無御座勿論他所より参住居仕なもの猶又急度相改寺請印形取置可申候且此帳面ノ外老人も洩候もの見聞候を隠置後日ニ頭はハハ其もの五人組ハ不及申私共如何様ノ曲事ニも可被仰付候。為後日之而如件

播州穴栗郡上ノ村下組

百姓惣代 源左エ門

安政五年年三月

年寄 茂平

庄屋 弥右エ門

白石忠太夫様

御役所

家族数調

九人……二軒	四人……一〇軒
八人……一軒	三人……一二軒
七人……七軒	二人……一二軒
六人……七軒	一人……一二軒
五人……一三軒	

(男一人……八
女一人……四)

上ノ村下組七十六軒

総人口 二九四人

一軒平均

三・八六人(一人だけ世帯十二軒)

村高 一三四石一斗三升八合

一軒平均

一石七斗六升五合

世帯主の平均年令

男(六七軒) 五二・〇才

女(九軒) 五一・四才

持高別軒数(牛九疋)

一〇石……一軒(牛一)	七斗……一軒
九石……一軒(牛一)	六斗……三軒
六石……一軒(牛一)	五斗……四軒
五石……一軒	四斗……六軒
四石……五軒(牛一)	三斗……五軒
三石……一軒	二斗……三軒

二石……九軒(牛一)	一斗……四軒
一石……二一軒(牛三)	一斗以下……三軒
九斗……一軒	
八斗……六軒(牛一)	

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
 (神姫バス山崎待合所内)
 FAX (0790) 62-7589

人 別 御 改 増 減

上ノ村下組

年	村 高	家数	人 数	男	女	牛
安政 1 年			3 0 1			
安政 2 年 卯	1 3 4 石 1 3 8 合	7 7	- 3	生 5 - 8 死	生 4 縁 1 - 4 死 - 1 縁	9
			2 9 8	1 6 4	1 3 4	
安政 3 年 辰	1 3 4 石 1 3 8 合	7 7	- 9	生 4 - 9 死	生 3 縁 3 - 8 死 - 2 縁	9
			2 8 9	1 5 9	1 3 0	
安政 4 年 巳	1 3 4 石 1 3 8 合	7 7	- 1	生 2 縁 1 - 1 死 - 1 不縁	縁 3 - 4 死 - 1 縁	9
			2 8 8	1 5 9 (1 6 0)	1 2 9 (1 2 8)	
安政 5 年 午	1 3 4 石 1 3 8 合	7 6	+ 6	生 6 縁 2 - 1 死 - 1 縁	生 4 縁 1 - 4 死 - 1 縁	9
			2 9 4	1 6 5 (1 6 6)	1 2 9 (1 2 8)	
安政 6 年 未	1 3 4 石 1 3 8 合	7 6	- 1	生 3 縁 2 - 5 死	生 1 縁 1 - 1 死 - 1 縁 - 1 不縁	9
			2 9 3	1 6 6	1 2 7	

兵庫紙幣史の研究第一〇号・第一三号に山崎藩及び郡内に関係ある記事が載っていますので掲載いたします。

目次

一、播 芴 姫路 亀山 札	須磨 服部 甫扇 氏 藏
<small>本徳寺 亀山 肝煎 勘定所 (二十文) 裏表 押掛印付</small>	
一、播 芴 山崎 藩 札	伏見 荒木 華泉 堂 氏 藏
裏表 (一 匁)	
一、全 山崎 藩 札	全 同 上
裏表 (五分)	
一、全 山崎 藩 札	全 同 上
裏表 (三分)	
一、全 山崎 藩 札	全 同 上
大形 一 匁 裏判	
一、全 山崎 藩 札	全 同 上
弘化 一 匁 表	
一、山 城 谷 御 殿 札	大 阪 龜 嶋 利 哉 氏 藏
二階 堂 出 張 所	

一、不 明 札

裏 判

大阪 龜嶋利哉氏藏

一、播 笏 姫路 龜山 札

本徳寺十二文裏判

伏見 荒木華泉堂氏藏

一、全 鍵掛山 札

山内通用此の札裏判なく表のみにて通用

全 同 上

一、全 山崎藩 札

錢五厘札市場通用

全 同 上

京都藩札研究會

大正十五年四月

荒木豊三郎




弘化四年
錢五分
丁未正月
融通錢手形



此手形以相渡可申




駿手貨形
文政元寅年
五月吉祥日
山崎町
引替所



引替所


 兵庫山崎
 銀會所




弘化四	主	
丁未正月	錢三分	

市場商用
融通手形

引替所


 兵庫山崎
 銀會所




此手形以相渡可申候



錢五厘 覺 市場 商用手形

播磨国宍粟郡に於ける
【紀州藩の五ヶ国通用札に関する史料】

本誌第11号に山東正巳氏の「紀州和可山藩五ヶ国通用札」につ
いての御報告がありました。当宍粟郡にも入っていたようで、
次のような記録がありました。

慶応三年十一月八日 晴

一御公儀より御觸有之候紀州銀札 皆河又右衛門安積和太郎⁽¹⁾
上三河沢右衛門方にて引かへ致候間山崎町ニて融通致呉候様⁽²⁾
橋屋鹿二郎ヲ以右三人より頼有之ニ付 同役へ相談致右之趣⁽³⁾
申上候所 御意被成候ニハ 公儀より御觸も有之 猶右三人⁽⁴⁾
ニ而引かへ候由ヲ以 町々へ頼ノ趣沙汰致置 先方へも 鹿
二郎ヲ以御頼義 町々江沙汰致置候と返事致候而 宣敷趣ニ
被仰聞候

- (1) 大字、以上三村とも大坂谷町代官所支配（安積村は町と 安志藩領に二分）
- (2) 山崎町（本多一万石）
- (3) 山崎の有力商人安井鹿二郎
- (4) 本文は山崎藩によって任せられた町の大年寄の一人、波徳寧の『御用録』中にある文で、大年寄役として他に平瀬源右衛門・進藤丈右衛門が同役で交代に町会所へ勤めていた。大年寄―町年寄―組頭が町方三役。
- (5) この『御用録』は安政五年（慶応四年）まで現存。米・酒・大豆・油・豆腐などの物価統制、藩私札の交換、町々の事件等々の記録。

鳥羽弘毅

（兵庫県宍粟郡千種町千草七〇八）

【注】(1) 皆河村（現宍粟郡安富町）

(2) 安積村（現宍粟郡一宮町）

(3) 上三河村はもと宍粟郡、昭和30年より佐用郡南光町の

『宍粟鉄山並金屋鑄物史料』

発行される

当郷土研究会員である山崎町岸田の宇野正碓氏が本年四月『宍粟鉄山並金屋鑄物史料』と題したB6版三二六頁の史料集を発行された。同氏は三十年も以前から千草鉄に惹かれ、教職のかたわら宍粟郡北部から佐用郡一帯の山間部のたたら製鉄跡を訪ねては苔むす墓碑や古文書を調査し続けられた。

昭和四十一年『千草鉄山史料上』を刊行され、続いて中巻、下巻と相次いで発行された。

今回は、それ以後発見された鉄山関係史料と山崎町金谷（古くは金屋）の長谷川氏が営んでいた鑄物師の文書や近郷社寺の梵鐘のうち、作者金屋村長谷川氏を追って紹介されている。（発行者は是川文庫、一冊三千六百円（消費税込み）で入手することができます。）入手を希望される方は、姫路市飾磨区恵美酒六六二―一は川文庫 電話〇七九二―三五―一二四六へご連絡ください。

表装全般

…古いものを
大切に…

表具師 **松本永春堂**

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62-0122

蔵書の活用について (其の四)

事務局

会報第71号から引続き蔵書の紹介をいたしておりますが、
これの利用については会報71号15頁をご覧ください。

書名	著者又は発行所名	備考
歴史手帖平成元年2月より8月号まで	名著出版	
兵庫紙幣史の研究12号より14号まで	兵庫紙幣史編集所	
歴史と神戸28巻第1号より4号まで	神戸史学会	
神戸史談 264号 265号	神戸史談会	
民俗文化第307号	滋賀民俗学会	
風来No.3	寺本躬久	
機関紙「風」13号から20号	日本風土記の会	
ひらめキョンシーノール	下里正樹	安井寄贈
近畿藩史大事典第5巻	雄山閣	
仏像を旅する(山陰線)	至文堂	
大分の旅24号 花のある風景	大分県観光協会	安井寄贈

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アグロ

竜野店 竜野市竜野町富永 ☎(0791)63-3226(代) 営業時間AM10:00~PM8:00	山崎店 宍粟郡山崎町今宿 ☎(0790)63-2111(代)
---	---

山崎郷土研究会会報総目次

「山崎郷土会報」第61号

昭和58年4月25日発行

近世初頭の山崎藩(一九)

島田 清

宍粟の神々(二) — 原始信仰の成立と展開 —

岩井 忠彦

「山崎城」について

前田 昇

前野四郎氏の功績に感謝して

入江 静夫

事務局だより

五十八年度山崎郷土研究会役員紹介

西播磨の指定文化財について

「山崎郷土会報」第62号

昭和58年10月15日発行

近世初頭の山崎藩(二〇)

島田 清

宍粟の神々(三) — 歴史の流れの中で —

岩井 忠彦

山崎町内の地名(二)

入江 静夫

老木

堀口 春夫

春の研修旅行記

志水 美好

史跡部だより

事務局だより

「山崎郷土会報」第63号

近世初頭の山崎藩(二十一)

島田 清

長水城の盛衰(上)

岩井 忠彦

宍粟鉄で鍛えられた山崎八幡神社の奉納刀について

前田 昇

山崎町内の地名(三)

入江 静夫

秋の研修旅行記

志水 美好

事務局だより

「山崎郷土会報」第64号

昭和59年9月5日発行

近世初頭の山崎藩(二十二)

島田 清

長水城の盛衰(中)

岩井 忠彦

佐藤善五右衛門景長と津田九郎右衛門の刃傷(上)

堀口 春雄

高野山参拝の記

志水 美好

史跡部だより

久保 寅夫

「山崎郷土会報」第65号

昭和60年4月20日発行

近世初頭の山崎藩(二十三)

島田 清

長水城の盛衰(下)

岩井 忠彦

津田九郎右衛門の殿中刃傷(下)

堀口 春雄

本多家文書「参考関係係」からみた山崎八幡神社

山崎町の地名

史跡部

本多家文書「参考御系伝」からみた山崎八幡神社蔵

本多忠勝画像

秋の旅行記

叡山回顧

会長就任のあいさつ

役員名簿

事務局だより

前田昇

志水美好

織金義雄

堀口春雄

山崎町の地名

秋の旅行記

会費の値上げのお願い

事務局だより

建部恵潤
志水美好

「山崎郷土会報」第66号

昭和60年9月5日発行

近世初頭の山崎藩(二十四)

お稲荷さん物語(上)

近世穴粟郡の耕地造成(田井村の畠田の場合)(上)

字地名「尼ヶ端」の伝説

春の旅行記

事務局だより

島田清

根岸元彦

古文書研究会

資料部

安井清介

近世初頭の山崎藩(二十六)
地名小晰 その二 衣坂

近世穴粟郡の耕地造成(下)

春の旅行記

近況報告

史跡部報

役員変更のお知らせ

六十一年度予算

事務局だより

島田清

資料部

古文書研究会

志水美好

堀口春雄

「山崎郷土会報」第67号

昭和61年3月23日発行

近世初頭の山崎藩(二十五)

お稲荷さん物語(下)

近世穴粟郡の耕地造成(田井村の畠田の場合)(中)古文書研究会

島田清

根岸元彦

近世初頭の山崎藩(二十七)

穴粟郡における若干の小字地名

地名小晰 その三 清水口

深情と地蔵崇拜

島田清

建部恵潤

資料部

加藤昭彦

丹波路旅情

昭和六十二年度役員

事務局だより

織金義雄

「山崎郷土会報」第70号 創刊15周年記念号

昭和62年9月1日発行

近世初頭の山崎藩(二十八)

島田清

丸のついた宍粟郡の山名

建部恵潤

山崎六地藏物語II 延命地藏の巻

古地名小喃 鹿沢・遠藤坂

資料部

総道神社由緒記

春の旅記

志水美好

「しゝさは」「志佐波」目次集

部会構成・地区幹事一覽

事務局だより

謹んで故山下宇市様のご冥福を祈ります

長年にわたり河東地区支部長として郷土研究会のお世話をいただき
ました山下宇市様が去る六月十一日逝去されました。ここに専
心より感謝御礼申し上げます。
会報No.73に新役員表を掲載しておりますが、一部異動がありま
たのでお知らせいたします。

役員		変	更
役職名	前任者	後任者	
河東地区支部長			
紺屋町地区幹事			
寺町			
西鹿沢			
西鹿沢			
中			
岸田、矢原、野々上			

事務局だより

一、秋の研修旅行案内を会報に挿入しています。参
の方は早目にお申し込み下さい。

二、郷土研究会の存在を認められ最近多くの方が入会
部落があります。会員数の少い部落の幹事さんは
も多く会員が増加するようご紹介下さい。

(山崎郷土研究会事務局)

山崎町出水町 安井清介 宅

TEL 六二一〇一四番